

ENGLISH CAFÉ



Main Dish

特集

子どもたちの主体性を育む授業の在り方

VOL.5



ON THE MENU TODAY

・【コラム】子どもの「学びに向かう力」を育む……P1

・【授業実践①】子どもたちの主体性を育む授業づくりP2

・【授業実践②】自分の言葉が伝わる・自分の言葉が伝わる楽しみ……P4

・【授業実践③】子どもの言いたいを引き出す工夫……P6

・【コラム】英語を子ども自身の言葉として……P8

COLUMN

子どもの「学びに向かう力」を育む

教師が授業改善に取り組もうとすると、自身がどのように教えるのかということにのみ注力してしまいがちだと感じることがあります。子どもたちが理解しやすいように、発表しやすいようにと様々な工夫や配慮を凝らしたことがマイナスに働き、子どもたちが粘り強く思考したり、友だちと交流したりする機会がないまま、授業が流れるように終わってしまい、結局、学習内容が期待していたほど身に付かなかった。こんな経験はないでしょうか。

新学習指導要領においては、子どもの「学びに向かう力・人間性」を育み、「主体的に学習に取り組む態度」という観点で評価していくことが求められています。ここで目指す「主体的に学習に取り組む子ども」というのは、言い換えれば、授業や家庭でどのように学習すれば、目標達成・課題解決できるのかという「学び方」を知っている子どもということになります。

外国語科の教科書や外国語活動の教材を見ると、授業や単元のゴールに向けて「聞くこと」→「話すこと（やりとり）」→「話すこと（発表）」、「聞くこと」→「読むこと」→「書くこと」など、複数領域の活動を子どもが主体的に取り組む中で知識及び技能の向上が図られるよう工夫されています。

例えば、授業で「英語で自己紹介を行う」という言語活動に取り組むとき、はじめによいモデル（目指す姿）を示しながら、どのような姿勢で臨めばよいのか、どんなステップで発表の質を高めていけばよいのか、言い方がわからなくなったときにはどうやって解決すればよいのか等を事前に指導しておくことで、子どもたちが主体的に活動することができます。また、この際、グループで発表しあうなどの協働性を取り入れることにより、主体的に活動する集団を育成することにもつながります。

私たちは、子どもにどれだけ学びを預けられるでしょうか。子どもの姿を見取り、適時必要な指導を入れながら、一人ひとりの「学びに向かう力」を育む。そんなダイナミックな指導ができる腕と器をもった指導者が、この時代に求められていると感じます。

ENGLISH CAFE

子どもたちの主体性を育む授業づくり ～1人1台タブレット端末の活用を通して～

いわき市立中央台南中学校
教諭 平松 勇人



1. 子どもたちの主体性とICT

GIGAスクール構想により、本校においても2学期から1人1台のタブレット端末の活用が始まりました。タブレットの導入以前から活用している電子黒板機能付きの大型モニターとあわせて、学校のICT環境が飛躍的に整備されてきています。子どもたちの学習における主体性を育むためには2つの要素が重要であると考えています。1つ目は子どもたちに「やりたい」と思わせる「動機づけ」、2つ目はその思いに応えるための「環境づくり」です。日々の授業にこれらの要素をもたせるうえで、ICTは多くの可能性を秘めていると考えます。これまでの授業の中で、新しく導入されたタブレット端末を有効に活用し、子どもたちの主体性を育む手立てを試行錯誤してきました。その実践について紹介します。

2. 自分のパフォーマンスを振り返る。 ＜カメラ機能の活用＞

話すことの活動に取り組む際、タブレットのカメラ機能を活用して自分のパフォーマンスを記録させています。子どもたちは撮影した映像を自分で確認し、事前に共有した評価基準をもとに自身の発話内容や話し方の課題点を見つけ、それを修正しながら自分のパフォーマンスの向上を図ります。授業の終わりに、タブレットの教材提出機能を活用して各自の映像を教師に提出させ、その時間の評価の材料としています。



図1 タブレットを用いた
コミュニケーション活動

3. タブレットの特性を生かした教材づくり。 ＜学習支援ソフトによる教材の配信・回収・共有＞

タッチ操作やインターネット接続ができるタブレットの利点を生かした教材を作成し、日々の授業に取り入れています。これらの教材は、タブレットに搭載されている学習支援ソフトを活用することで配信・回収を行っています。カードの切り貼りなどの活動準備時間を短縮でき、その分コミュニケーションの内容を充実させるための指導に時間を割けるようになりました。



図2 タブレット上の教材に
取り組む様子。

画面を操作しながらの活動は、子どもたちの反応も良く、活動に対する意欲向上にもつながっています。また、子どもたちの画面を教師側で一覧したり、全体で共有したりすることができるため、つまづきに対する支援や考えの共有が容易となっています。

〈これまでに作成した教材の例〉

- アルファベットの並び替え・大文字と小文字のペアリング
- インフォメーション・ギャップ(絵を動かして目的地に着く。)
- 道案内のマップ(現在地を表す駒を動かしてその位置をたずね合う。)
- レストランのメニュートレイ(注文された料理を配置する。)
- オリジナルピザ(ほしい食材のイラストを配置する。)
- スピーチ活動における提示資料

4. Googleの各種機能との連携

タブレットの操作に慣れてきた2学期末から、主に高学年の授業において教職員に割り当てられているGoogleアカウントを使用し、Googleの各種機能を子どもたちと共有し活用しています。

(1)Googleフォーム

授業アンケートを学期末に実施し、指導の成果や子どもたちからの要望を把握して次学期の指導改善に役立てています。また、5・6年生ではテスト作成の機能を活用し、授業で扱った単語集のページを見ながら、絵で示された単語のつづりを入力する教材を作成して取り組ませています。ALTとのインタビューテストの合間など、隙間時間で取り組めるように作成した教材ですが、大文字・小文字の間違いや単語間のスペースの抜けなどがその場で精密に判定されるため、子どもたちは真剣な眼差しで「文字」文字に注目し、単語を入力しています。その他に、いつでも入力可能な質問フォームも作成しています。子どもたちが疑問に思ったことをいつでも質問できる環境を整えることで、英語学習に対する主体性を育みたいと思っています。

(2)Googleスプレッドシート

年度当初から、各学年においてCAN-DOリスト形式の振り返りシートを活用し、子どもたちの主体的な学習を促すとともに、その状況を把握しながら指導改善に努めています。3学期から、この振り返りシートをGoogleスプレッドシートで作成し、タブレット上で児童と共有して入力させています。子どもたちの学習記録を一括して管理するとともに、毎回の回収・配付の時間を無くすことで、子どもたちが英語を用いて活動する時間をより確保することをねらいとしています。

Unit 7 My Best Memory 私の思い出シート									
パート	CAN-DOリスト	達成度(達成した項目に○を記入)				達成度(達成した項目に○を記入)			
Starting Out	自分の思い出について話せるようになる。	よくできる	まあまあできる	あまりできない	できない	自分の思い出について話せるようになる。	よくできる	まあまあできる	あまりできない
	自分の思い出について話せるようになる。	☐	☐	☐	☐	自分の思い出について話せるようになる。	☐	☐	☐
	自分の思い出について話せるようになる。	☐	☐	☐	☐	自分の思い出について話せるようになる。	☐	☐	☐
Part	CAN-DOリスト	達成度(達成した項目に○を記入)				達成度(達成した項目に○を記入)			
Year Ten	自分の思い出について話せるようになる。	よくできる	まあまあできる	あまりできない	できない	自分の思い出について話せるようになる。	よくできる	まあまあできる	あまりできない
	自分の思い出について話せるようになる。	☐	☐	☐	☐	自分の思い出について話せるようになる。	☐	☐	☐
	自分の思い出について話せるようになる。	☐	☐	☐	☐	自分の思い出について話せるようになる。	☐	☐	☐
Part	CAN-DOリスト	達成度(達成した項目に○を記入)				達成度(達成した項目に○を記入)			
Final Communication	自分の思い出について話せるようになる。	よくできる	まあまあできる	あまりできない	できない	自分の思い出について話せるようになる。	よくできる	まあまあできる	あまりできない
	自分の思い出について話せるようになる。	☐	☐	☐	☐	自分の思い出について話せるようになる。	☐	☐	☐
	自分の思い出について話せるようになる。	☐	☐	☐	☐	自分の思い出について話せるようになる。	☐	☐	☐

図3 振り返りシートの例

5. おわりに

これまでの実践を通して、外国語指導の様々な場面でICTの有用性を感じてきました。小学校外国語教育の目標である「言語活動を通じたコミュニケーション能力の育成」に迫るために、従来の指導法にICTという選択肢を加え、目の前の子どもたちに寄り添った指導に今後も努めていきたいと思っています。



ENGLISH CAFE

自分の言葉が伝わる・自分の言葉で伝える楽しみ ～Retellingを軸に据えた授業実践と成果～

盛岡市立渋民中学校
教諭 中坂 明子



渋民中学校の生徒は、先輩たちから伝統として引き継いだ「群読劇」に日々取り組み、地域の行事や文化祭で披露しています。役者になれば台詞、合唱、独唱、剣舞、踊りの練習を、スタッフは衣装、照明、音響として裏方を支えます。日頃の練習の甲斐もあり、表現をすることに対して意欲的な生徒が多いと感じます。生徒たちが持つこの表現力の高さを英語の授業でさらに伸ばしたいと思い、Retellingを積極的に取り入れた授業実践に取り組みました。



1. 単元について

(1) 単元名 PROGRAM7 A Gateway to Japan (SUNSHINE ENGLISH COURSE2)

(2) 単元の目標

ALTに自分のお気に入りの日本文化や日本の物を知ってもらうために、日本文化が海外に与えた影響について書かれた対話文を読み、読んだことを基に考えたことや感じたことを、英文を引用しながら伝えることができる。

この単元では、日本のポップカルチャーが世界に与えた影響について書かれている題材を扱っています。本校のALTは日本での在学経験があり、単元内の登場人物と同じように、日本文化に慣れ親しんでいる先生です。そこで、日本文化について「何を」「どのくらい」知っているのか、JTEがALTにインタビューする映像を生徒に提示しました。会話の中からALTが知らない日本文化・日本の物は何かを探り、ALTに何を紹介したいかを決めました。



2. Retellingの実践

(1) Retellingをくり返す

「Think」の学習では、Retellingを授業の中で二度行います。前時の復習として「授業開始時」に行い、新しく習った「Think」のページを「授業の最後」に行います。各ページ3～4回ほどRetellingを行います。Retellingに向けて、教師のModel Retelling、デジタル教科書のリスニング、Q&A、音読練習などできるだけ多くの英語に触れてから即興でRetellingを行っています。

1回目は思うように言いたいことが表現できず、苦戦する生徒が多いですが、ペアを替えながらRetelling活動をくり返す度に、仲間の表現から学び、言葉を推敲していく様子が見られました。表現に困る場合やつまずきポイントがあった場合は、その都度全体で共有し、生徒たちの言葉を拾いながら進めました。相手に伝えるために頭の中で「再構築」することで、「誰が」「何をするか」が明確になり無意識的に文法事項を理解する手助けになりました。Retellingをくり返ししながら、少しずつ生徒の中で表現力が高まっています。



(2) 英語を英語で理解するために

Retellingの活動を行うためには、日本語を介さず、本文の内容を十分に確認する必要があります。生徒の理解を促すために、ICT機器の活用は有効でした。例えば、英単語とその単語を表す写真をセットで見せたり、教師による「Model Retelling」で写真を見せたりしながらRetellingをします。視覚的な補助があることで、生徒の興味関心を高めるだけでなく、直聴直解の体験を積み重ねることにもつながりました。Retellingを行う際は、教科書に記載されている写真の他、その話題に関連する写真も提示します。全ての写真を使わなくてよいことは事前に伝えます。生徒たちは、使いたい写真を自分で選びながら相手に伝えます。また、様々な習熟の程度に応じるため、2年次に学習した表現だけでなく、比較的易しい表現も併せて教師がRetellingをします。始めのうちは自分が言える表現をつなげて会話をしていた生徒も、慣れてくると、教師や仲間のRetellingを参考に、新たに表現を取り入れる様子が見られました。



3. 題材との出会い

新しい単元に入る時は、「とびら」のページから想起できるものや、関連する内容を生徒と共有し、イメージを膨らませます。PROGRAM7では、ALTへのインタビュー映像の他、海外で開催されるアニメのコンテスト映像などを見せ、日本のポップカルチャーについての導入を行いました。「とびら」で生徒が題材に魅力を感じ、「読んでみたい」と感じることは大切だと思います。この題材への興味をそのまま持続させるため、「Scenes」を一度飛ばして「Think」を先に学習する単元計画に挑戦しました。新出表現や新出文法を習わないまま進むことになりましたが、生徒たちはこれまでの知識を使いながら本文の内容を文脈から判断し、大方理解することができました。

また、時代背景や登場人物の詳細など、話を追加して「Model Retelling」を行うと、より深い思考につながり、題材に興味を持つ生徒も出てきました。題材の良さを生かすことで、曖昧さに耐えながらRetellingを行うことは十分可能であることを生徒たちの姿から学びました。



4. 実践の成果と今後の課題

Retellingをくり返す活動を通して、生徒たちの話すスピード、話し方、表情やジェスチャーなどの非言語コミュニケーション力も身についてきたと感じます。一方的に伝えず、“Do you know him?” “Have you ever heard of it?” “Oh, great!” などと、相手を意識して話す力もついてきました。自分の気持ちが伝わる・相手の想いを理解できる楽しさをもっと感じられるような授業をこれからも目指していきたいです。



ENGLISH CAFE

子どもの「言いたい」を引き出す授業の工夫
～進んでコミュニケーションを図ろうとする子どもの育成を目指して～

由利本荘市立鶴舞小学校
教育専門監 佐々木 真智子



1. はじめに

今年度、鶴舞小学校では、文部科学省委託「小・中・高等学校を通じた英語教育強化事業（英語教育改善プラン推進事業）」／AKITA英語コミュニケーション能力強化事業「拠点校・協力校英語授業改善事業」に取り組みました。「英語による言語活動の充実」と「教員の英語力及び指導力の向上」等を目指し、日々の授業を考えました。6年生の授業では、「本市に新しく赴任したALTにおすすめの料理を伝えよう。」という単元のゴールを設定し、授業を行いました。

2. 単元名

Let's think about our food. ～おすすめ料理を伝えよう～

3. 単元目標

- 食べ物に関する簡単な語句や表現を聴き取ったりおすすめ料理を伝えたりすることができる。
- おすすめ料理について、必要な表現を選択したり構成を考えたりして伝えることができる。
- 相手に配慮しながら、おすすめ料理を伝えようとする。

4. 指導計画（主な学習活動）

1 時限目 ・ Small talkを聞き、単元の見通しをもつ。

2 時限目 ・ 食べ物や味の言い方を知る。
・ おすすめ料理の食べ物や味を言う。

3 時限目 ・ 調理方法の言い方を知る。
・ おすすめ料理の調理方法を言う。

4 時限目 ・ 頻度や原料の言い方を知る。
・ おすすめ料理の原料などを言う。
・ HRTのおすすめ料理を聞く。

5 時限目 ・ おすすめ料理について紹介する表現を考え個人やペアで練習する。

6 時限目 ・ おすすめ料理について、魅力が伝わるように先生や友達に紹介する。

7 時限目 ・ おすすめ料理について、魅力が伝わるようにALTに紹介する

8 時限目 ・ ALTのおすすめ料理の情報を聞き取る。

5. 授業について

< 単元計画の工夫 >

まずは単元のゴールを考えるとところからスタートです。子どもたちのことをよく知る学級担任と話し合って単元のゴールを決めます。今回は、6年生の子どもたちが食べ物に興味があることや家庭科の授業とも関連付けられること、そして相手意識や目的意識をもって活動に取り組めることなどから、単元のゴールを「ALTにおすすめの料理を伝えよう」としました。

また、子どもたちが伝えたいことはどんなことか、どんなところがおすすめなのかを確認し、子どもたちが伝えたい内容を取り入れるようにしました。「まずは食材と味を言う」、「秋田で有名な食べ物だと言いたい」、「大豆からできていると伝えたい」、「作って食べてほしいから、混ぜて焼くと説明したい」等、子どもたちなりのこだわりがたくさんあることが分かったので、1時間ごとに自分の伝えたいことが学習できるように単元計画を立てました。（4. 指導計画 参照）

< 「言いたい」を「言える」にする工夫 >

新しい言葉と出合う場面では、子どもたちとやり取りをしながら必要な言葉を引き出すようにしました。

”What’s this?”と問いかけたり、”Anything else?”と問いかけたりしながら、子どもたちが言いたい言葉を学習します。授業者も事前にカードなどを準備しますが、もし準備していない言葉が出たとしても、ALTにその場で教えてもらったり次の授業で確認したりし、子どもたちの思いに応えるようにします。

また、子どもたちの様子を見て、ちょっと難しそうだと思ったら、簡単な言葉（Easy version）に言い換え

たり、英語と日本語のミックス（例：”Sauce and 生地 are good combination.”）や単語のみでもよいことなどを伝えたりすることで、子どもたちが安心して話せる環境を作るようにしました。

やり取りをする場面では、相手を変えて複数回行うようにします。やり取りが終わるごとに、困ったことや、言いたいけれど言えなかったことがないかを確認し、その後のやり取りが深まるようにしました。



< ポスターの作成 >

言葉だけで伝えることがまだ難しい子どもたちにとって、写真や絵などがあるとやり取りの手がかりとなります。本単元でもポスターを作成し、紹介する際に使用しました。1時間ごとに、学習した中から必要な情報を書き加えるようにし、短時間で無理なく作成できるようにしました。

6. おわりに

単元のゴールを明確にしたことで、子どもたちは意欲を高めながら授業に取り組むことができました。また、言語材料を一方向的に与えるのではなく、子どもたちが伝えたい内容を取り上げることでなんとかして自分のおすすめポイントを伝えようとする姿も見られました。授業後の振り返りには、「ALTの先生がうなずきながら聞いてくれて嬉しかった。」、「次はもっと詳しく話せるようになりたい。」など、思いが伝わる楽しさを感じた記述がたくさんみられました。今後は、目指すゴールの姿を具体的にイメージし、よりよいやり取りにつながるような中間評価の在り方を考え、実践していきたいとします。



英語を子ども自身の言葉として

先日、ある中学校の英語科の初任者の先生から、子どもたちにどうやって語彙力を付けたらよいかという相談を受けました。

「フラッシュカードで単語を何度も練習させたり、単語テストを行ったりしているのですがあまり効果が上がりません。教科書に出てくる単語だけでなく、関連することばも扱って語彙を増やすように工夫しているのですが…」と悩んでいましたので、小学校で外国語の授業を参観して、文字を使わずにどのように英語をインプットしているか学ぼうと誘いました。

小学校6年生外国語科のある活動から

JTE : 今日の授業では、クラスの友だちの良いところを英語でほめましょう。
はじめに、めぐみさんの良いところ、ほめたいところは？

学級 : 「やさしい！」「みんなに親切！」 などなど。

ALT : Oh, Megumi, you are kind to everyone. Megumi is kind.

JTE : マーク先生、優しいとか親切というのは、kindっていいですね。
では、皆でめぐみさんに言いましょう。

学級 : Megumi is kind!

めぐみ : (照れながら) Thank you.

JTE : では、翔平さんのよいところは？

学級 : 「まじめ！」「学級委員長だからちゃんとしてる！」

ALT : Oh, Shohei, you are a leader of this class. Shohei is serious.

学級 : おお～。Shohei is serious!

翔平 : Thank you! 先生、でも自分より武士くんのほうがまじめです。

ALT : OK. Shohei, you can say it in English.

翔平 : Takeshi is very serious.

JTE : すごいね。very を付けてvery seriousって言えたね。じゃあ、次は誰にしようか…



授業では、この後も数人の子どもにフォーカスして、cool, cute, smart, friendly, shy, strong, cheerful, careful という表現を引き出した後、5人グループのメモリーゲームを通して、友だちのことをほめた後、最後に自分のことを言うという活動が行われました。

“A is smart, B is kind, C is shy, D is friendly, and I am dangerous! (笑)”

授業を見た後、この初任者の先生は、自分自身が中学校の時に受けた指導方法から脱却できずにいたことに気付いたと言っていました。子どもたちの人間関係や日常のリアルな環境と英語を結びつけることで英語が子ども自身の言葉となっていくこと、子ども自身が発信したい表現を選んでいく過程を通して語彙が豊かになっていくのだと感じたようです。